

ハワイ大学臨床推論ワークショップ参加報告書

2023年8月21日～8月25日の日程でハワイ大学医学部にて行われた Summer Medical Education Institute Student Workshop に参加して参りました。参加者は佐賀大学をはじめ、愛知医科大学、浜松医科大学、弘前大学、高知大学、大阪医科薬科大学、昭和大学、琉球大学から24人が参加していました。ワークショップは英語で行われ、PBL、模擬患者との医療面接、注射実習などが行われました。

P B L

一日目に呼吸器、二日目に循環器の内容でPBLをしました。チューターはJABSONの学生がしてくれましたが、問いかけが上手かったです。私たちが考えに詰まるとこの症状についてはどう？というようにPBLが円滑に進むよう手助けしてくれました。印象的だったのは、PBLで正解を出すことを目的にしているわけではなく、learning issueを出していくことに重点を置いてPBLをしていました。日本でPBLをしている時はPBLを進めることが目的になっていましたが、学ぶべきことを抽出することが重要なのだと感じました。

Physical Examination Skills

心音や呼吸音の聞き方について実習を行いました。音の判別の説明がされるだけでなく、患者さんとのやり取りのコツも教えていただきました。部屋に入る時のノックが第一印象になるため、患者さんに信用してもらうためにノックが重要なことや患者さんに聴診の許可を取ることなども強調されました。患者さんとのコミュニケーションの面についても具体的なレクチャーがあったことは、日本と違う雰囲気があり印象的でした。

禁煙指導

模擬患者さんとの医療面接はこのワークショップの中で一番緊張した項目でした。内容は禁煙指導と身体診察でした。禁煙指導は5A'sという手法に沿って質問し禁煙の計画を患者さんと立てていくという流れでした。次の日に行った身体診察は、模擬患者さんの心音や呼吸音を聞く実習でした。実習後は数人の録画を見て学ぶ時間があり、振り返りができるためより実習の学びを深められました。他の学生の動画を見て、私はベッドに寝てもらう時に体を支える配慮が足りていなかったことや聴診後に患者さんを安心させるような配慮がもう少しできたなど感じました。実習後には、紙でフィードバックがもらえ何ができて何ができていなかったのかわかるため非常にありがたかったです。

注射実習

筋肉注射、皮内注射、自己注射を他の学生や自分に対して行いました。本当に注射をするという聞いて怖さを感じていましたが、実際にやってみるとそれほど痛くなかったです。実習前

の講義で先生が、ゆっくりすると痛みを感じやすいので皮膚を通過する時は速くすることがポイントとおっしゃっていました。そのため、相手に筋肉注射をする時はなるべくためらわないことを心がけて刺し、相手も痛くなかったと言ってくれました。しかし、最後に行った自己注射は自分の腹部に行ったのですが、おそるおそる刺してしまいそれは痛かったです。身をもって思い切っなければ痛いということがわかりました。教科書を読んでいると糖尿病の治療などで自己注射が記載されていますが、それがどんなものなのか、患者さんは自己注射をするように言われてどう感じるのかを体感でき貴重な経験になりました。

シミュレーション

シミュレーション機械で聴診や気管挿管の手技を練習しました。佐賀大学で使用したことのあるマネキンは心音を聞く用、呼吸音を聞く用のマネキンで分かれており、それらは上半身だけでした。ハワイ大学で使われていたマネキンは全身あり、心音や呼吸音が聞こえ、頸部・鼠径部・手首で脈を触れられ、瞬きもするというリアルなマネキンでした。患者が心停止に陥った時、モニターを繋げたり、CPR をしたりとすべきことがたくさんあるためグループで協力しなければなりません。スムーズな連携の仕方として、自分が今何をするかを口に出し、疲れている人がいたら交代を申し出て連携することが大事だと教わりました。気管挿管では、咽頭、喉頭のあたりの解剖が苦手でしたが、柔らかい模型で何度もトライできて解剖の理解も深まりました。

豊富なシミュレーターでの実習や注射実習、PBL など日本にいるだけでは経験できない学びができ、これからの学びの幅が増えたように思います。全てが英語で行われたため、英語に触れながら医学を学ぶという密度の高い 5 日間でした。自分の医学英語の拙さがかくかしく思うこともあったため、海外の医療者とコミュニケーションがとれるようもっと勉強が必要だと感じました。また、今回はワークショップへの参加という形でしたが、模擬患者さんに対して医療面接をさせていただいたことや JABSON の学生の知識の豊富さを目の当たりにしたことで、実際の海外の医療現場も診て学びたいと感じました。

また、教科書や講義だけではわからないことを多く学びました。患者への寄り添い方や救急時のグループの連携を学び、教科書でよく見る注射やその他の手技を実際に練習できたことは大きな収穫でした。特に、模擬患者さんとの面接は実際に診察室に 1 対 1 で話をしたため、将来どのように患者さんと向き合うのかという想像ができました。今勉強していることがこのような形で実践されるということがわかり、勉強への意欲が高まりました。

また、JABSON の学生や日本の様々な学生と交流でき、たくさんの刺激を受けました。日本の学生の中には大学の試験や CBT が近いにもかかわらずワークショップに参加している意欲の高い学生や、英語を流暢に話せる人も多く参加していました。また、JABSON の学生は、ワークショップ中にいつでも私たちのサポートをしてくれ、放課後にご飯に連れて行ってくれたりしました。そんな学生たちと切磋琢磨して一緒に学べたことは貴重な経験

になりました。

最後に、今回ワークショップでお世話になった、JABSONの先生方、学生の方々、Kori-Joさん、参加にあたり準備や支援をしてくださった小田先生、福森先生、医学教育開発部門の木本さん、佐賀大学学生海外研修支援事業、医学部同窓会、医学部後援会の皆様、本当にありがとうございました。この5日間での学びをしっかりと生かせるよう精進して参ります。

ハワイ大学 Summer Medical Education Institute student workshop2023 参加報告書

2023年8月21-25日実施

JABSOM の学生と共に参加したワークショップは、私にとって刺激的な学びの場となりました。学んだことを振り返りつつ、印象に残った学習内容を挙げてみます。

まず、JABSOM の学生が取り組む PBL の姿勢に感銘を受けました。Learning issue をたくさん出し、分からないことを素直に口に出す姿勢は、自身の知識を向上させる上で重要なステップだと感じました。私も日常の学びにおいて、遠慮せずに疑問や不明な点を出していくことが大切だと改めて認識しました。

また、PBL の中で異なる専攻の学生が互いに学び合う機会があることに関しても感心しました。異なるバックグラウンドを持つ学生同士が知識を共有し、お互いの理解を深めることで、レベルの均一化が図られていくことは JABSOM の PBL における重要な意義の一つだと分かりました。

PBL のアプローチにおいて、病気の診断に関する学び方も興味深かったです。病名を特定するだけでなく、症状からどの臓器に障害が起こっているかを考えていくことが、臨床的な診断により近づく方法であることを学びました。この思考方法を鍛えることは臨床現場での診断力の向上にも繋がると感じました。



PBLで作成したホワイトボード

実技練習においては気管挿管、気管支鏡、注射など非常に充実した体験ができました。学習してきた検査や治療について体験を伴う学びが出来たことは非常に嬉しかったです。JABSOM の学生は実技練習にも熱心に取り組んでいるようで、注射器の扱いなども非常に

慣れていて驚き、自身の技術向上への意欲が高まりました。

医療面接の練習は、模擬患者さんに来ていただく本格的なものでした。適切な質問を考えることは、日本で以前実習があった際も難しく感じていたので、英語で行うのはなおさら大変でした。医学英語の単語だけでなく、相槌も含めた適切な受け答えのパターンをもっと身につけておけばよかったと少し悔いが残りましたが、今後の課題として取り組んでいきたいです。

英語でのコミュニケーションについては、特に PBL で専門的な医学英語の実力が問われたように感じます。Hypothesis を挙げる際は単語勝負になる場面が多く、私は呼吸器分野の単語力に課題が見つかりました。普段の会話や授業の際は、JABSOM の先生方や学生たちが私たちの話を一生懸命聞いてくださって、親切にサポートしてくださったおかげで多くの英語コミュニケーションを取ることが出来ました。

ワークショップを終えて、私の今後の抱負は以下の通りです。

まず第一に、JABSOM の学生たちと共に参加した PBL のアプローチを積極的に取り入れて学びを進めていきたいと思います。Learning issue を積極的に出し、分からないことを恐れずに発言する姿勢を大切に、他の学習者との交流を通じて知識を深めていきたいと考えています。自身の知識の不足や疑問点を隠すのではなく、それらを克服するために努力する姿勢を持ちたいと思います。

そして、病気の診断方法についての学びも、今後に活かしていきます。病名だけでなく、症状から臓器障害を推測する思考方法を常に意識し、問題解決力を養い、よりの確な診断ができる医師になることを目指します。

さらに、JABSOM の学生たちを見習って実技練習にもよく取り組みたいと考えています。そして将来、実際の現場で患者に寄り添いながら、安全で質の高い医療を提供できる医師になりたいと思います。

プログラムを通して JABSOM の学生や他大学の医学生達と共に学び、議論することで多くの刺激を受けることが出来ました。今回のワークショップを通じて得た知識、経験、刺激を基に精進し、学びを深めていくことが私の今後の抱負です。この経験を胸に、今後も前向きに学び続け、成長し続ける姿勢を持ちたいと思います。この素晴らしい経験を提供してくださった先生方、スタッフの皆様方、一緒に参加した仲間たちに感謝申し上げます。

ハワイ大学臨床推論ワークショップ参加報告書

【プログラムを通して学んだこと・感じたこと】

WSを通じて、ハワイ大学のPBL、英語での医療面接、手技など様々なことを学ぶことが出来た。

・PBL

PBLは佐賀大学の授業でも行っているが、新たに学べるが多かった。ハワイ大学の学生は、まず何に注目すべきか、必ず確認すべきは何かを順序だてて思考していた。自分たちのPBLでは与えられる情報が増えて診断がついてくると、その症例の病態のみに注意がいつの間にか失われていたが、自分がより学修すべきポイントはどこか、自分たちの理解の不十分な点はどこか、を、PBLを通して探ることが重要であると気づかされた。

ハワイ大学の学生は、臨床医学をあまり学んでいない段階からPBLを実施する、と聞いていたが、医学に関する知識が非常に豊富で大変驚いた。自己学習の時間や、アウトプットの時間が自分には十分でないのかもしれない。

・手技、医療面接

ハワイ大学では、全体的に日本の大学の学生よりも手技を学んでいる時間が多く、手技を学べる設備も充実しているように感じた。実際に針を刺しての注射実習や、気管支鏡、気管挿管のシミュレーションは初めてのことで、少々難しかったが、非常に良い経験をできたと感じている。特に、注射実習は印象的で、初めて人に針を刺す、初めて人に針を刺す人に刺される、のはなかなか緊張した。そして、初めてでも意外に痛くはないことが分かった。

座学だけではなく、早い段階で手技を多く学ぶことが出来れば、医師になることへの自覚も強まるのではないか。

英語での医療面接練習も行うことが出来た。英語を話すことに意識が向いてしまう。患者さんと何気ないコミュニケーションをすることに十分に気が回らなかったように思う。よりよい診察をするにはどのような点を改善したらよいか、詳細なフィードバックをもらうことが出来、とても貴重な体験であったと思う。単純に語学の良い練習にもなった。

今回のプログラムに参加することで、他大学の医学生とも交流することが出来た。お互いの学習情報を共有したり、相手のスキルに刺激を受けたりした。たくさんの仲間に出会

えたことは、今後自分が医学を学修していく上で、さらに医師になってからも、大きなモチベーションになると思う。今回のプログラムで経験したこと、感じたこと、考えたこと、出会った人々は一生の財産であると思う。

【今後の抱負】

まずは CBT に無事合格することが第一の目標である。ハワイ大学での PBL を通して、医学的知識がまだ十分でないことを実感させられた。

また、今後も英語の学習を継続していきたい。英語での日常会話スキルを磨くことと、医学英語を習得することを、まずは継続していこうと思う。単純に医療英語を覚えるだけでなく、症例を検討したり、論文を読んだり、少しでもアウトプットする機会を設けたいと思う。

今回ハワイで学んだ PBL のポイントは、今後の自分たちの PBL でも共有し、活かしていきたい。

2023 Summer Medical Education Institute student workshop 参加報告書

私は 2023 年 8/21~8/25 に John A. Burns School of Medicine University of Hawaii

(JABSOM)で行われた 2023 Summer Medical Education Institute student workshop に

参加しました。

1 日目

ワークショップの概説と JABSOM の 2 年生による学校案内を受けた後 PBL を行いました。大学によっては初めて PBL を受ける学生もいたため、初めに簡単なイントロダクションが行われました。その後 JABSOM の生徒をチューターとして PBL が行われました。今回の症例は咳嗽を主訴とする呼吸器疾患の症例でした。Step1 の後に Welcome lunch があり、ここで他大学の学生と仲良くなることができました。午後は PBL の Step2 からスタートしました。PBL の流れは基本的には佐賀大学で普段行っているものと同じです。しかし Step3 では各々調べてきた Need to know のプレゼンはパワーポイントを使って行いました。佐賀大の Step3 では文字ベースでまとめているのに対し、見やすさや伝えることを意識したプレゼンの仕方は米国における病院のカンファレンススタイルを反映していると感じました。できるだけわかりやすくしようとイラストやコミックを使ったりして、作っている自分自身も楽しむことができました。

PBL 後は二つのグループに分かれ、私達は初めに基本的な問診・聴診の方法を教わりました。とてもわかりやすい説明だったので、まだ OSCE の内容を学習していない私でもついていくことができました。その後は人体模型を使って正常な肺や腸蠕動音と異常音の違いを聞き比べる機会がありました。全身の脈拍を触れることができ、まばたきやカテーテル挿入までできる、実際の患者さながらのこの模型には驚きを隠すことができませんでした。最後に大学の前で記念撮影をしてこの日のプログラムは終了しました。

2 日目

午前中は smoking cessation の講義から始まりました。喫煙はアメリカでは死亡率に直結する喫緊の問題となっており、ニコチンガムやニコチンパッチを使って徐々に減煙していく医療介入は効果がありそうだと感じました。

その後は PBL を 1 日目とは違ったメンバーで行いました。メンバーが変わるとまた違ったディスカッションの雰囲気となり昨日よりも楽しく感じました。1 日目で一度経験しているということもあり、より白熱したディスカッションとプレゼンになっていました。心電図の読み方や薬の名前などまだ習っていない範囲も出てきますが臆せず JABSOM の生徒や 4

年生の班員にすぐに質問することが大切だと感じました。

3日目

3日目は模擬患者さんを相手に1日目に学習した Smoking cessation に関する模擬面接を行いました。OSCE の練習をまだしていない私は佐賀大学でも医療入門の授業で一回しか模擬患者さんと話したことがなかったので初めはとても緊張していました。授業で習った禁煙指導に必要な5つの A—Ask, Advice, Assess, Assist, Arrange を直前に友達と確認しあい、医療面接に臨みました。しかし結果的にいくつかのプロセスを抜かしてしまい、患者さんの話を聴くことより自分の伝えたいことを優先させるような形で終わってしまいました。リアルな人間を目の前にすると自分がどうなってしまうのかということが知れる、痛いけれど良い機会になりました。また優秀な医療面接をした生徒の動画を見る時間もあり、こちらもとても良い勉強になりました。4日目の医療面接につながるように、この日の夜は Review の用紙を見直しました。

4日目

この日は初めに注射の実習から始まりました。この実習は生理食塩水が入った注射を互いにペアになって打ち合うという内容でした。今回の WS では皮下注射、筋肉注射、皮内注射の全てを体験することができました。皮下注射に関しては糖尿病患者さんがインスリンを打つ時と同じく自分の腹部に注射を打ちました。これは自分が医師になった時の患者さんの心情理解に非常に役に立つ経験だと感じました。その後は明日のアロハランチの際につけるレイ（首飾り）を作りました。今回はカラフルな糸を使って作りましたが、他にも花や葉、貝を使ったレイがあるそうです。最後に二度目の模擬患者面接を行いました。評価シートでは全てにチェックをつけることはできませんでしたが確実に昨日よりも改善された実感でき、患者さんの話もしっかり聞けるほど心に余裕を持って臨むことができました。4年生になった時の OSCE でもこの経験はかなり生かされると思います。

5日目

最終日はシュミレーターを使った実習でした。JABSOM には気管挿管のできる模型や内視鏡のシュミレーション、小児の人体模型など高度な器具が取り揃えられており、臨床に入る前に経験できてよかったと思える実習となりました。その後はアロハランチがあり、フラダンスの披露とハワイの郷土料理を楽しんで全てのプログラムは終了となりました。